

勇婦傳

繪本更科艸帑

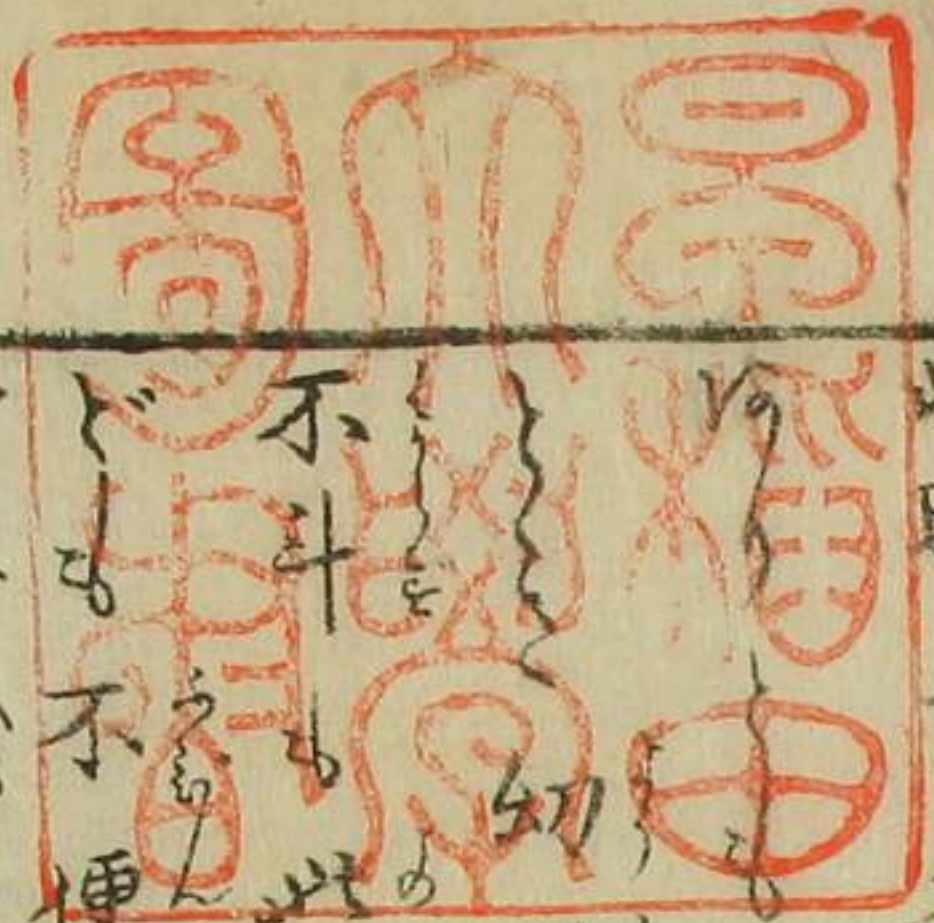
三編
卷之二

特
3
977
12



13
巻 12

木



勇婦 繪本更科草紙三編卷之二

遠州小夜中山麓栗杖亭鬼卯著

兆典司勝丸と助於話

此時寺元生死之助早苗之助日向つく足下項王勇
行先數方の軍兵飛道具とり取り取囲い
幼君汝補佐一々出るる雑々かご一々天
不斗も此見と我おきり何國の人の小見ハハ
ども不便あぢ首討く若君乃山身替り
ハ重姫君と二ツの首と持く九郎左エ門と欺く
足下ハ若君ゆ海も一兩日深山一身と志のむ
追人のゆくゆく一と伺い忍ぶ上京も是万全乃

勇婦 繪本更科草紙三編卷之二

謀ありしつふし未終らざる松間より其謀
 不可あり何ぞ九郎左エ門ほどの者朝夕見馴
 勝丸の似首と滅し人や我し良謀あり心と
 静く閑くいと立出る者ハ已前逃りし僧を
 兩人驚く其詞と閑く彼僧悠くと立出扱も
 主従三世の縁ありし滅ありし今手
 かけむし見ハ尼子晴久公し仕し森脇市正
 孫千代丸とつふものあり市正其子太郎次郎ハ
 先年毛利と戦つて討死せし太郎次郎が妻幼
 子と懐くして各の東福寺に來り出家ふかを
 師よきのと置終り病小死とて息とりこし
 迄

養育しし此兒父の墳墓へ詣ん事と頓願
 師是とゆして愚僧して雲州へ送らるるに
 主従の縁はきき勝丸の身代りしある事感
 余りりり去り朝暮勝丸と見知り敵丸
 即左エ門いふ其首と誠とせんや我ハ是東福寺
 の殿司明兆といふ者し天晴画と好し妙り
 其首と勝丸とて見知り頭陀の画具取
 出り落る涙と水とれ画具とて首
 紅粉と粧し勝丸君と寸分遠ふ事あり生
 死之助早苗之助是と見知り大に感心し且森脇
 忠臣一世ありしと暫落涙して止るる多枝



尼子勝丸

早苗之助

兆典司

勝丸兆典司小助け
らと鹿口とのん
とん



生死之助

此典司うきのみも早苗之助勝丸と伴い深山に忍び
 つまみ忍びおわらんや愚僧が謀を見多中彼千代丸が
 死骸の衣裳と脱せ勝丸君より着勝丸の衣裳
 と死骸に着せ我先ほど此所へ来るに敵の穴大勢
 くり巻我くと通さど去り寄る墓叢の赴法
 断る一人の大將割符と興へて是は雲州一國の通
 切手あり是より行づると我に度一則是
 行先乱くして廿八日都へ歸りし人
 とも疑ふまづ早苗之助一人田と切抜り
 追付都まづ供りて愚僧同伴の児と

殺さし猶もかゝる謀と授けりまを不審もむね
 さんが中納言教行卿は東福寺師担の因りて
 此度教行卿八重姫九重姫も懇傳言あり
 けり外あり思ふ事と教へては始終
 けりし結りて二人大に感誠は僧ハ
 尼子家の氏の神あり勝丸君の血行末頼
 其ハニツの首と九郎左エ門より猶も忠臣
 顔り尼子の危事あり三寸不測の舌とも助
 勝丸君世より出りて関あり九郎左エ門は亡
 尼子再興せん方寸のくらしり早苗之助必
 く勝丸君とたのふ泰らると明兆より

まりの置富田の城へ歸りたる北典司ハ勝九君と
 千代丸ガ死骸の血を顔かどに塗早苗之助と
 松間ノ忍バ世の手と引く元の所へ立戻りては
 軍兵ども追取巻寂前割符と下されし一兩人
 何して立歸るぞ不審ありとつよ明北少も
 騷ぐど富田の城下まゝ参り一人の
 若者阿修羅王の荒々勢よくあつると幸よ
 蒨まの此見大に恐まゝ早く國へ歸らん
 歎る故孔夫子も危邦に居らば乱邦に
 入らばと宣はるや都へ歸るに去らばと立歸
 りぬ情の刻符返心奉ると恭しく出せば

軍兵も詞とて去る所も長居して
 百年の命と夫らん無念の事ふらば
 帰国あるべしと式臺して可愛や小兒も
 怪我やと見し所く血のうりたるそや
 僧も此所と立去りたる其若者退付来らん
 急くとつふ北典司ハ志をまゝりと勝九と伴ひ
 是れも立去りたる時分ハ五月早苗之助
 山中足毛打まゝり大身の鎧をうり
 廻し一人あけ来まゝハ早苗之助そ逃る
 ちと筒ささと揃ゆまゝ早苗之助声よくけ必を
 まり事ちし我若君と守護して松原追来る所

豈に人や寺元生死之助小筒と以勝丸君試
打殺そ主君の敵のふと追つらふ敷多乃
軍勢つとと隔る戦ふら寺元を見失ふあり
りやきみとあそ某尼子の家亡ら上へ出家も
あらん此所来り若君まきまき上
某と飛道具と殺らふも及ぶまきと同入る
早苗之助が死物狂い目と物見せんと呼ら此手
の大將軍兵と下知て象一勝丸と打殺せとの
事あらぬ寂早生死之助勝丸と打ら上はの小冠
者一人打とつら何れの手柄もあはじ
殊に恐らき若者手向らるる道と

むらいて通らば早苗之助の虎口とのれ典司の跡
と慕ひ上方とて急ら
九重姫と熱湯と浴して貞と守る話
叔も播州上月城のいかに事らるる
九重姫と夫鹿之助むくく蒙らしておられ
今日別業の宴に日頃の積鬱晴らと悦び
折ふ家来大汗と成り立帰り盲人徳市が
謀ら主人鹿之助殿と初鮎之助兵庫之助殿
ふも妻酒ふ命と落ら寺元半四郎富田
の城氣つらと早馬と雲州へ帰らと
追ら吉来と九重姫の只夢の心地とと

柵諸共忙し果しおのころ所へ鹿之助の亡骸
 乗物ふ昇乗く家来ども立帰へし始り其実
 ふう事とあり鹿之助の死骸と見ゆふふあり面影
 もあり肉くく碎脱し只骨と皮も残り
 骸骨とありしれハ一目見ゆふつと気と
 失ひのしと柵の顔と水おどろき呼生まゆ
 斬心付くはち骸と押動し前後不覺
 二致のひが我夫志く待て来も三途の供
 せん懐釵抜り既ふの自言とくはれは
 周章抱留こハ物狂ひく富田の城の音信
 姉君いふはり心と静くし

心きくそら女を死骸と得と改り肌小暖り
 脈とらに絶脈とび幽し手くくは姫君歎き
 うふちれは姿ありは脈も絶へど
 肌小暖りあま蘇生し人事疑ひか
 かと付くは姫も立寄く見ゆは脈も通
 暖まはバシリ心と安ド醫とまよき
 茶とゆへくも出入息のあはれは茶喉に納
 事かきまはせんも只守り居ゆの
 横道兵庫之助が死骸も家来りら帰る
 浮舟はらゆはれ歎きくは是も
 脈きへど暖りは葬る事も口位外の

早苗之助



早苗之助

兆典司



九重姫
熱湯
浴を
守る

尻子勝九

山中鹿之助

九重姫

九重姫

事がまきかゝる二三日過り頃表番の士與
来りて及と脊負一僧の十二三の児と伴ひ
僕一人召けり九重姫と面會せんといふ
通一トらんや伺ふに柵志むく思案して
かゝりの騷りき時節国所よりいふに姫君に
面終らぬ不審ありとて追歸せしむ
姫君呼笛りいふある人よもりぬ奴家小逢らんや
りて追歸せん本意は冷し珠に僧とりの上
夫の後世菩提とてのりて通せし宣ふ
ぞ取次の士素外にて入来ると見たりは甥君勝九人
とく頃頃側小りり五月早苗之助ふれば如何

勝九君早苗之助あつと驚くは勝九九重姫ふり
付の叔母君いふやとさうくと泣くは此時彼の
僧詞をいれ我は洛東東福寺の典司いふ者あり
此父教行卿の師担の間少きまびく面會する
此度鹿之助横死富田城の騷動ゆりて来掛りて
朕九と救し事の由とけり語りては早苗之助も
九郎左門が謀叛し姉君八重姫九重姫と妻と
人鹿之助殿と妻殺し毛利と心と合せ
義久公と生捕藝州へ引渡八重姫君と手に入
口説くは八重姫君貞と守りて終
自害し果つて勝九君も既り危かりし此僧

のカよく漸此所より落延より寂早やどあく當城と
 九郎左工門が一味のやつと受取に来り一時も
 落延より事延引する時ハ九郎左工門「恥め
 と受取らんといひ言ひしに問はし毎上姫君
 の心驚心致世中よ々々憂事の何らなきと忙して
 柵心と付鹿之助極の亡骸誠上骸骨ありあり
 脈も絶と暖りの何らなき僧の功力よ蕪生
 一事もやゆらん心覽下さきとさき抱て出
 られに勝九早苗之助一目見ると情を日本
 廣しといひどもさき勇士のありさかと思は
 声いふからしむ位に北典司を寄て得と見る

是ハ是班猫毒あり此毒熱酒に投ざると即死を冷酒
 和さし其毒やううして肉碎三年のりちよ
 死し見し十日も何れも食氣絶え
 死んハ必定あり今日一日よ白米三粒づ口小
 入くさき穀氣絶えて死す事なり其
 良醫と求る療治はば蕪生疑あり悟
 多し九重姫少カ得従今奴家身ハ誓し
 ぬらも夫を蕪生さやんと思はば九郎左工門
 奴家不慈慕して行末とづぬるさき何国不
 忍んも終よの尋出さき恥しと受人つら
 一入らば又ふしても身ハ穢さすれぬ夫の

一 該一大事あはれ是と人質とあして口説く人よも
 いふも仕ぐしといふ人志をく沈吟し
 が基司よはぎろ湯を天憲よりぞんぶ浴を
 うもゆりてさうんとむろ息絶し柵の周章
 さつにこの致のゆまりの狂氣しうふや
 のりぬ抱きし漸心付起上りたつ湯玉乃
 逆湯と頭より浴をば惣身朱のくぬ容窮
 くの顔も忽癩病疾の形とありさ北典司大
 感一烈夫や貞女かなうこののう上
 い九郎左エ門執心人豕脊負来り一笈の内一
 鹿之助の骸と入まはるる肩に廻国のとく成

一 先都一登り多し教行卿のく身と忍び蘊生乃行
 と旋一我も一諸ののびきあきど勝九君ハ大切
 の人が早苗之助諸とも一日もく東福寺一急
 一城受取も今一兩日おもひ柵まく介抱
 して跡より来る都より再會せんて笈と殘して
 出の姫君ハ苦痛よく物とて宣ひ勝九
 さましくつりうと早苗之助の手を叔母君の
 小事ハ小事あはれ身ハ父君とて歸一尼子乃表
 再興一の山所存のち不甲斐あ無理
 一引立すさ北典司諸ハ心強くも出ゆき
 心根おしとてはれ

寺元生死之助浮舟と助る話

かく九重姫ハ二三日と徑し心ハ中々成り
似ど所爛滅し癩疾のこしく
姫鏡臺に向く心とんと大悦び
念願成就す柵旅の用意せよと多く
家来いへるむわり明兆の残りへて
駭とさき先柵ハかひくき女あまは是と負て
迎国の女スー出立く出立きのみたを錦備の
且悦尼子九郎左工門ハ毛利合躰して思の伴義久
鹿之助と謀り自富田の城主と成るは上月の城

押領人と思し所寺元生死之助ニツの首とあつと
来り重姫とむく口説といつも貞と守て得心
刺某と恥し切しけし無執首と打小覽小入
ハ勝丸ハ早苗之助守護して堅達婆王の荒
見一ハ中手合と小筒と以て
勝丸が胴腹と打貫ハ早苗之助主の敵と我と
目ケ馳来いと手と手筒と向ハ飛道
具とやいと何国もかく逃失ハ勝丸と
首打くハ覽よ入いとまことハ九郎左
工門大悦び首實檢とハ八重姫勝丸と相遠
らざれ生死之助とらぎ立く汝ハ家腹心の臣なり



浮舟

浮舟
 赤星軍八
 小掛想
 之助軍八
 生死
 懸
 不
 死



寺元生死之助

赤星軍八

いしくもくらくらふはり是より上月の城よりいふ九重姫
と奪いより鹿之助一味のやつて切とて城を
受とて加勢して田原兵次赤星軍ハと
そく遣ば一刻もやく打立ばと田原赤星
召つて生死之助諸も上月の城とけとて
りりらと兩人畏く軍勢と催してと立んせ
勇とていし生死之助ハ明兆勝九ノ上月へ立より
事の中とて述九重姫とてやく落してまつて
その日より病と称して四五日引こりて九郎左工門
大に引こりて催使とて十日
して今ハ九重姫も遠く落のいさくと打立り

此事上月の城より聞ゆるいふも誰らつて城を
打死せんといふ者もりりて城を乱世の忠臣
りりて衆星の登ハ隠れ見へざらざらて度不
暗久の世に坂豊島の合戦に高名で高橋太郎
が嫡子高橋渡之助の内勇秋宅甚助政名とて庵
之助の内勇各壮年の勇士鹿之助が恩顧と忝せて
只二人僅百人むりて随一楯筆るして健氣ふて
生死之助城際より押寄鯨声と作つて中を身
と敵將ハ僅二人百人むりて随一必死と思ひ定め
るらりりてあまきバ生死之助是と感と田原赤星
の二士と向つて此二人ハ義士あり容易小責る時と

多くの軍勢と損むべし一某是と説くと矢文と城中一
射入るれば高橋是と云ふ一某謀く九郎左工門は
此節死むと云ふ時よりいへる城と聞か
勝丸君と守立尼子の家と再興一と云ふは
西將寺元が志と感と降参のよりいへる
軍兵と不殘追出—高橋秋宅西へ入り城と受取
赤星軍ハハ已が手柄とせん早くも鹿之助が
屋鋪へ馳入九重姫と尋る—寂早四五日已前
何国もろく落多いと聞たり—一大事ありと
追く追人とりけし—田原の兵次ハ野と見まはし
兵庫之助が屋鋪へ来く—一人窺窺く婦人の

骸骨と抱く歎き悲しむらうと由元来田原ハ色好
男のしは是し—とて好淫せん—とて婦人大
怒く汝何者ありとバワと恥しんとて乗ち
横道兵庫之助が女房浮舟とつし者ありと名退く
—とつし兵次嘲笑ひ某ハ當城受りの後入田原
兵次とて古今獨歩の士あり汝此城より上へ赤河
宵のまじき筈あり其骸骨ハ横道兵庫之助あり
—とて宋花身よりせん—とて志らふ
—とて既ハ奸淫せん—とて所一寺元生死之助
是れ營中見し—の為来り—此躰と見てら

うけ入兩人と引まけ浮舟と呵くいつくは何もの
あまび受りり城一のころ居る也早速退一
殊一見らるしき死骸と抱くは悲しい甚不吉之
女之事あまびあまび外へもあまび左に
執心の骸骨汝一りゆら聞えり引拂ふ
先年浮舟へ替へ古書籠と命の親と常
座敷に置つと出り骸骨とら浮舟
脊負せ有無と言せば外へ追拂は田原兵次も手の内
握り一室と奪いとらまへ心地もれどもいふ
事なく残り多げし浮舟と跡と見やり寺元
諸も本丸一とらるる

浮舟危難叢中涙之助の傳

浮舟も九重姫柵とり骸骨の口へ米と入る傳と
教へるよと日く白米三粒と入るも残らぬ
末のありり側より介抱しる小田原
兵次が為り既し恥しと受んとし寺元生
死之助の情よりりて夫の骸骨も門外へ出る
何国とて行んと忙然としてり先年
浪花小りりしき妹女郎浮橋とり者ハ室乃
津より勤奉公より風のあるり聞ぬ
是とて夫と種生かると心と取直

草鞋くさざわしるきしるき高たか菟うおもげし打う脊せ負おひ室むろ代しろ津つのうと一
 志こころしるきしるき終つひよあけぬ旅いし夫ごの骸がを入いり
 著つ菟うあまは道みち墓ぶしるきしるきぞあけぬ松まつ原はらへあどり付つきた
 南みなみの滄そう海かい漸ぜんしるきしるきて早はやか北きたの山やまけしあけぬ
 やりの妻つましるきしるき黄昏たふしとくし時ときしるきしるき帰かへる鳥とり入い相あ
 のしるきしるきの閑ひまゆきゆきいしるきしるき女おんな心こころよまて落おち人の身み
 あまは昔い夫ごと慕あこひしるきしるきあけぬ旅いし一ひと逢あひ思おもひ
 便たやすりし今いま何なに国くにと當あたりしるきしるきあき身み候あは袖そでし
 浮う舟ふねが宿しゆく求もとんし一ひと錢せんの貯たくわえしるきしるきあけぬ旅いし
 肩かたし喰く入いれ家いへ夫ごあし思おもひしるきしるきあけぬ旅いし力ちから不た漸だと
 松まつ間まの比ひ堂だうしるきしるき付つ狐きつね格かく子ことあけぬ旅いしきけしるきしるきあけぬ旅い

わらわ見みしるきしるき石いしの地ぢ藏ざう尊そんありしるきしるきあけぬ旅いし有ありしるきしるきあけぬ旅い
 六道ろくだう能のう化けの石いし佛ぶつ行ぎやうしるきしるきあけぬ旅いし守まもりしるきしるきあけぬ旅い
 菟うの蓋がさしるきしるきあけぬ旅いし夫ごの骸が骨ほね一ひと三さん粒りゅうの米こめを合あせぬしるきしるきあけぬ旅い
 家いへ食くしるきしるきあけぬ旅いし石いしとまらしるきしるきあけぬ旅い
 一ひと著つ菟うと守まもり夫ごとそひぶしるきしるきあけぬ旅いし心こころありしるきしるきあけぬ旅い
 哀あはれしるきしるきあけぬ旅いし愚おろち田のう原はら兵へい次じの浮う舟ふねが艶えん色しきよ迷まよひ
 本もと丸まるしるきしるきあけぬ旅いし共とも伴ばん忘わすれしるきしるきあけぬ旅いし情なさけ思おもひしるきしるきあけぬ旅い
 しるきしるきあけぬ旅いし遠とほくしるきしるきあけぬ旅いし生なま死し之の助すけが
 眼まなこと志こころのび蜜みつしるきしるきあけぬ旅いし奪うばひしるきしるきあけぬ旅いし心こころのまらしるきしるきあけぬ旅い
 家いへ来き横よこ田のう伴ばん藏ざうしるきしるきあけぬ旅いしいそしるきしるきあけぬ旅いし事ことありし
 遠とほくしるきしるきあけぬ旅いし追お付づく生なま捕とら来きしるきしるきあけぬ旅いし十じゅう人にんむらり



茨之助
浮舟が難
と助る

勇傳全集三編卷二



浮舟
茨之助

箱残敵

勇傳全集三編卷二

追人^{おいつ}と出^いしきき^{しき}バ伴藏^{ばんざう}けき^けりり^り走^{はし}てよ
 追^おひ道^{みち}くやう^{やう}ときき^き小室^{こむろ}の津^つのう^うと^とはつ^{はつ}子
 行^ゆし^し閃^{ひら}たり^りま^まり^りやつ^{やつ}り^りと猶^{なほ}も^も是^{こゝ}と^とる^るゆ^ゆ
 け^けよ^よ辻^{つじ}堂^{どう}の裏^{うら}の女^にの泣^な声^{こゑ}を^をい^い是^{こゝ}は^は人^{ひと}と^と立^た寄^よ
 伺^{うかが}ふ^ふこ^ころ^ろも^もま^まり^りど^ど浮舟^{うきふね}の夫^{おつと}の影^{かげ}と^と押^お動^{どう}じ
 上月^{うづつぎ}の城^{しろ}一^い二^にと^とら^らる^るま^ま美^い男^{おとこ}あ^あり^りこ^ころ^ろに
 姿^{すがた}に^に成^なる^るふ^ふゆ^ゆに^にま^まい^いの^の時^{とき}に^に無^な念^{ごん}を^を覺^{おぼ}え^えん
 今^{いま}一^い度^ど本^{ほん}腹^{はら}して^{して}浮舟^{うきふね}と^と伺^う伺^うと^と下^{くだ}る^るに^に其^{その}嬉^{うれ}
 ま^まい^いり^りる^る人^{ひと}浅^あ間^まき^きの^のま^まり^りと^と頼^{たの}む^むに^に此^{この}身^みや^や
 思^{おも}ふ^ふ声^{こゑ}と^と上^あり^り歎^{なげ}を^をく^くれ^れの^の伴^{ばん}藏^{ざう}聞^きき^きし^し
 逃^にが^がる^るも^もい^いく^くと^と追^おひ^ひり^り卷^まは^は浮舟^{うきふね}驚^{おど}ろ^ろし^し何^{なに}者^{もの}か^か

か^かる^る根^ね藉^{せき}ゆ^ゆり^りハ^ハヤ^ヤハ^ハ懐^{なつ}鈕^{ねう}抜^ぬり^り身^みを^を
 ま^まき^きバ^バ伴^{ばん}藏^{ざう}朝^あ笑^{わら}と^とま^まり^り一^い言^ご我^{われ}田^た原^{はら}兵^{へい}次^じが
 身^みを^をし^しり^り横^{よこ}田^た伴^{ばん}藏^{ざう}と^とい^いふ^ふ万^{まん}夫^ぶ不^ふ當^{とう}の^の勇^{ゆう}者^{しや}り^りと
 ま^まり^り主^{しゅ}人^{にん}兵^{へい}次^じ汝^にが^が色^{いろ}香^かを^を迷^まい^い召^めつ^つま^まり^り
 聞^き乃^の花^{はな}と^と泳^{えい}人^{にん}と^と仰^{おほ}へ^へと^と向^むふ^ふを^を尋^{たづ}常^{じょう}と
 心^{こゝろ}を^を随^まつ^つば^ば其^{その}通^とう^う異^い儀^ぎ小^{せう}及^{およ}び^び引^ひ括^{くわ}く^く召^めは^は
 其^{その}骸^{がい}骨^{こつ}と^と一^い分^{ぶん}様^{よう}と^とい^い呉^ご人^{にん}と^と兵^{へい}庫^こ之^の助^{すけ}骸^{がい}
 と^と片^ぺ手^てを^を引^ひ提^てい^いか^かと^と言^いハ^ハ通^とへ^へん^ん勢^{せい}力^{りき}を^を
 浮舟^{うきふね}ハ^ハ何^{なに}も^もし^しも^もり^りま^まり^り先^まま^まり^り兵^{へい}次^じ殿^{でん}
 の^の心^{こゝろ}を^をま^まり^りき^きま^まり^りし^しん^ん其^{その}亡^な骸^{がい}ハ^ハゆ^ゆり^りの^の人^{ひと}と
 つ^つい^いつ^つ立^た寄^よし^し見^みこ^こに^に兵^{へい}庫^こ之^の助^{すけ}と^と奪^うは^はり^り

伴藏と椽より下へ突かむせむ曲者逃れんと
 十人の捕手もくくと立ち上り既り危き所へ椽
 の下へ伏しきり非人先へ進み捕手四五人城
 狗子と投るが如く打つけ大欠びしてさうく
 やうゆききへ我我寐所へ理不尽と踏込さうく
 寐入り夢と覺れしと意根あき相宿さうく他生の
 縁此女中へ指さす事白癩さうく不中と堂の椽上へ
 二玉のいゝまゝさうく伴藏大に怒りうわらぬ
 胸を食め已が知る所へゆき者ともさへ打めせ
 と下知りまゝさうく十手より立打りかゝるさうく
 我ホ元来喧嘩好まゝさうく非人と成れん好物乃

喧嘩さく非人ありてうゆ子の獨りのまも狂人
 の喧嘩と見るふ付今一度もさうく喧嘩さうく
 見も思ひさうく相手へ取さうく不足なきゆ
 侍椽ごと其方より持参下さうく何よりの所
 馳走さうく捕手の十手引さうく捉横無
 盡し打廻さへこい叶ハトと捕手の者もさうく
 一成り逃れさうく伴藏大に腹を立ちき非人
 め逃れさうく刀打ち打さうく久しうさうく
 太刀魚の心馳走賞翫せんさうく戦さうく手煉
 無双の非人終り十手さうく刀と打場さうく
 詞も似む伴藏の頭をかゝるさうく鼻の逃るごとく

いづくもあく消失しつ浮舟の蘊生せし心地して
 を食と伏拜しつ身へ神佛危場を救
 うふいふあるへぞ名も明し便あき身の力とも
 あくくくまきく涙あく礼謝せらるる乞食打笑い
 我身の上と問も物くくも面あくれど身と
 落人に見も無し心やく思ふんと最前の
 幾き椽の下も問落涙り我ハ元播州室
 の明神の神主叢中主水が梓卯之助とせし
 者あり幼少より喧嘩と好む世のらぐき者と異
 名やと卯之助と言ふ言ぶ皆さりの痛くつみ心
 うや茨之助の言親主水くり余し

二十七年の年う室の傾城浮橋といふ小執心して
 るがひのちとと言ふせし元イリ貪
 窮の社家あまば金銀自由あつば浮橋が身揚
 も教りかかると親し我逢ふみバ詮方なく
 浮橋と盗と出さんしと見付ら終親主水
 が勘當しけく非人と成らるる最前室の妹
 浮橋よま久く便もゆひい成てんと獨り
 言宣ふと聞しうの浮橋が姉あつらるるても
 いちあり沢と聞まやしく思ふも非人の身と恥
 出やらばのりし捕手の者ども引立ゆらんとい
 りやく袂ハきくはといふも二世と言ふや浮橋が

縁者と聞て追拂おしな一たりいまいもい身の上委ありり
 一と始終と結むするは浮舟大うきふね一い悦よろこび何と隠かくん
 奴家のやつか母ははの身み一いりりかかくくのうままて
 上月の城つきづき一い夫おとこの抱かかへらきき一い二にととりりととりり人ひとををりりししが
 毒殺どくころ一い合城あひらぎの敵たよよとといい何国なにくにと當あたららししめめいいめ
 新町しんまちの妹女いもうめ即室いそむろの津つ一い勤とくくりりの事風ことかぜの
 便べん一い聞きつつららゆゆととかかふふそのそのううへへとと爰こゝまでまでの
 来きりり又また其その體てい骨こつの夫おとこ兵庫ひんぐわ之助のすけ殿のありり不思議ふしぎ
 ありり脈また絶たどど身み一いりりりりりりのの蘊生うんせいももりりん
 一い甚し善ぜん一い入いるる追お連れん来きりりとと委い細さいと物もの語ご
 一い茨いば之の助の手てと打うくく一い貞まこと節のうぶの志こころ感あはれれ心こころせせり

亦またも久ひさししく浮橋うきはしと對面たいめんのせせぎぎもも心こころの變かりり
 事ことも何なにとと是こゝより室むろの津つ一い伴ともひひををりり浮橋うきはしも
 面會めんかい一い身みの上のうへにに参まららせせんと東雲とうぐもの
 横雲よこぐもとともも一い茨いば之の助の古ふる甚し善ぜんと脊負せうい浮
 舟うきふね傍わらもも室むろの津つ一い急いそぐぐ

繪本更科草紙三編卷之二終

